

戯曲

友達・榎本武揚

①一九六七

定価

四八〇円

印刷

昭和四十二年十一月二十五日

発行

昭和四十二年十一月三十日

著者

安部公房

装幀者

安部真知

発行者

河出朋久

印刷所

奥村印刷株式会社

製本所

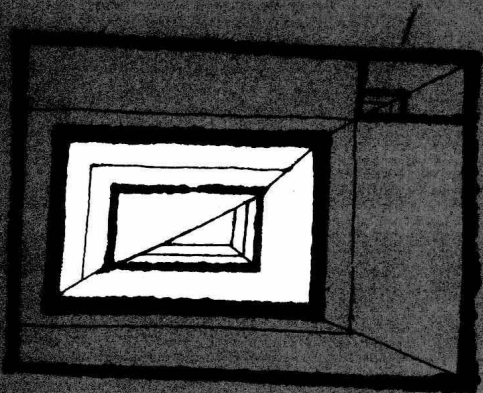
岸田製本紙工業株式会社

発行所

河出書房

東京都千代田区神田小川町三十一
六
振替東京一〇八〇二

友達
榎本武揚
戯曲



安部公房

河出書房

《黒い喜劇》

友 達

2 幕13場

友達のブルース

作詩・安部公房

作曲・猪俣 猛



よるのとかいは — いとがちぎれた くびかざり—
 あちこちに — とびちいて —
 あたためて くれた あのむね は —
 どこへ行って しまった —
 まーよ いっこ まよいっ こー

夜の都会は
 糸がちぎれた首飾り
 あちこちに
 とび散って
 あたためてくれたあの胸は
 どこへ行ってしまった
 迷いっ子 迷いっ子

登場人物

男

(三十一歳、商社会社の係長)

婚約者

(男と同じ職場に勤めている都会風の娘)

祖母

(八十歳)

父

(一見、宗教家タイプの紳士。くたびれてはいるが、礼儀正しい服装。鞆をかかえている)

母

(オールドファッションの帽子と眼鏡がよく似合う)

長男

(頭は切れるが、病身で陰性。元私立探偵。トランクを二つ持っている)

次男

(アマチュアボクサーで新人賞をとったことがある。ギターを抱え、トランクを下けている)

長女

(三十歳、男におそわれる夢を持ちつづけているオールドミス)

次女

(二十四歳、善意を結晶させたような、清楚で可憐な娘。小さなトランクを持っている)

末娘

(見かけによらぬ小悪魔)

管理人

(女)

元週刊誌のトップ屋

警官たち (二名)

1

甘い誘惑的なメロディで幕が開く。

夜の都会は

糸がちぎれた首飾り

あちらこちらに

とび散って

あたためてくれたあの胸は

どこへ行ってしまった

迷いっ子 迷いっ子

舞台には、中央でV字型に合わさった、衝立風の二枚の大きな壁。その上に、音楽のリズムに合わせて、左右から四人ずつの人影が現われ、次第に大きくなり、ついには客席にのしかかる巨人

のようになる。

歌が終ると同時に、両袖からそれぞれ、影の主たちが姿を現わす。計八人の、きわめて平均的なくせに、どことなく怪しげな家族たちだ。誰もがまだ無表情な、機械的な動作であること。その中から、次女が一人、中央に進み出る。(メロディだけは、続いていたほうがよい。)

次女 (前の歌詞を受けて、ロマンチックに、訴えるように) でも、見捨ててはおけないわ。可哀そうな首飾りたち、ひろってあげましょう。ひろって、穴に糸をとおしてあげましょう。(祖母を振向き) ねえ、おばあちゃん、出来るわね。

祖母 (ごく日常的に) ああ、出来るともさ、それが私たちの商売じゃないか。

次女 (客席に向きなおって、言葉をつづけ) 迷いっ子はいけないわ。一人ぼっちはいけないわ。糸におさなければ、首飾りにはなれないの。(父を振向き) ねえ、お父さん、私たち首飾りの紐になってあげられるわね。

父 (くどいぞ、と言わんばかりに) 分っているじゃないか、ヒモが私たちの商売さ。

次女 (メロディに合わせて歌う)

.....

あたためてくれたあの胸は
どこへ行ってしまった

迷いっ子 迷いっ子

末娘がとつぜん、大げさな長いクシャミをして、メロディを中断する。

母 まあ、まあ、可哀そうに。(一同に、非難がましく) 早く、どこかに落着かなけりや、もうお
っつけ十時になるのよ。

次男 まったくだ。(これ見よがしに、あくびをして) おれも、お喋りはもう沢山だね。

長男 (鋭く) 馬鹿を言うな。仕事じゃないか。

長女 (無表情に) そうよ、仕事よ。

メロディが始まり――

次女 (前の調子に戻って) だから、行かなければならないの。一人ぼっちの人をさがして、愛
と友情をとどけに行かなければならないの。私たちは、孤独をいやす、愛のメッセンジャ
ー。星のしずくのような、都会の窓々から、悲しいおのきを嗅ぎ当てて、倅せをとどけ
に行かなければならないの。(家族一同を紹介するように両腕をひろげ) そうなんです、私たち
は、こわれた首飾りの天使なんです。

同時に、家族たち、めいめいが自分の顔を下から懐中電灯で照らし、にっと気がかりな薄笑いを
浮べてみせる。それまでの雰囲気とのコントラストを、とくにきわ立たせること。

仕切り壁が左右に引いて、男の部屋になる。家具、調度をふくめて、赤っぽい粘土色、もしくは灰色で統一されていること。

上手、手前に、台所に通ずるドア。下手、奥に、別の部屋に通ずるドア。下手、手前に、玄関のドア。玄関わきに、格子状の靴箱。（この靴箱は、後で檻として使われるので、実際に格子でなければならぬ。また、ドアを含めて、すべての家具調度が、可能なかぎり単純化され、省略されていることが望ましい。）

男

（机に腰をかけ、ジャケツ姿で足をぶらぶらさせながら、電話を掛けている。電話機だけは本物であること。）じゃ、この電話、もう切るからね。後でまた、お休みを言い、掛けなおすけど……え？ 黄色いまだら？ まるでどら猫じゃないか。いや、ごめん、ごめん、君の趣味については、絶対ご信頼申し上げますとも……あ、ちょっと待って……（受話器を離し、耳をすませ）……いや、なんでもない。時間が時間だからね。いくらなんでも、今頃たずねて来たりする奴がいるもんか……うん、だから言っているだろう、次の給料日には、な

んとか引越しをすませてしまおうよ。それまでに、ちゃんと荷物をまとめておいてさ……
ゆっくりと近づいてくる、例の八人家族の、遠慮がちなしのび足――

……え、雨？……うん、雨かもしれないな……足音にしちゃ、人数が多すぎる。もったも、
下に、マージャン気違いの保険屋がいてね……むろんぼくには関係のないことさ。

急に足音が高まり、男、耳をそば立てる。家族たちが、上手から姿を現わし、一列になって舞台
正面を横切り、かついでいたギターを長男にあずけた次男が、玄関を通りすぎて振向いたところ
で、一同、停止する。父と、次男で、玄関を両側からはさんだ形になる。父が手帖を取り出し、
ページをくって、標識と見くらべる。うなずいて、後ろの次女に、合図を送る。次女、進み出
て、玄関の前に立つ。

次女、静かにドアをノックする。

……家だ！……（すばやく時計を見て）たぶん、電報だろうな、この時間じゃ。

次女、再びノック。

……（外に向って）はい、ちょっと待って！

その声を聞いて、家族たちに安堵の色がありありと浮ぶ。

……（受話器に）ぼく、ちょっと出てみるから。……じゃ、また後でね。ほら、キッスだ
よ。（唇をならし、受話器を置く）

次女の後ろをまわって、鍵穴から中をのぞき込んでいた祖母、男が出てくるのを見て、

祖母　ありゃ、なかなかいい男だよ。

父　シート！（祖母の袖をつかんで、引き戻す）

男　誰？　どなた？

次女（若々しく）　ごめんなさい、すっかり遅くなってしまつて。

男（相手が若い女であることに、気を許しながらも、ますます不審気に）　どなたでしょう？

次女　ごめんなさいね。もつと早くうかがうつもりだったんですけれど……

男、上眼づかいに首を傾げてみたりするが、けっきょく好奇心に負けて、ドアを開けてしまふ。

同時に、次男がドアの隙間に足をはさむ。父が把手をつかんで、引き開ける。家族一同、動きはじめて、ドアの前に一団となる。

呆然と立ちすくむ男。

次女　よかったわ、まだお休みじゃなかったのね。

父（親しげに）なあに、この頃の若い人たちは、みんな宵っ張りさ。

母（祖母の背を押しやりながら）さあ、おばあちゃん、上らせていただきますようよ、夜風は毒よ。

男（舌をもつらせ気味に）どなたです？

祖母（かまわずに上って行こうとしながら）おやまあ、殺風景なこと。

長女（強い好奇心を示して）仕方ないわよ、独り者のお部屋なんだもの。

次女（そうよ、だからこそ、お手伝いのしがいもあるってものじゃない。

男（狼狽して）待って下さい。なにか、人違いじゃないんですか。

長男（ゆううつそうな微笑を浮べ）ぼくは以前、興信所に勤めていたこともありましてね。

男（しかし……

末娘（私、寒いわ……

母（可哀そうに、アスピリンでも飲んで、早くおねんねしましょうね。

母が、末娘を抱きかかえるようにして、後ろから祖母をうながす。男がその動きをはばもうとした、その隙に、すばやく次男が、中に駆け込んでしまった。

男（君、土足はひどいじゃないか！

次男（おっと、失礼。（靴を脱ぐ）

その油断に乗じて、家族たちは、一気に玄関になだれ込み、最後に父が、後ろ手にドアを閉めて鍵をかける。八人に、同時に行動を起されては、さすがの男もはや対抗するすべがない。家族たちは、巧みに部屋の四方に散り、男をとりまくようにして、にっこりと例の笑いを笑ってみせる。

友 達

男（押され気味に）なんの真似です。気味が悪いな……

父（おだやかに）どうぞ、どうぞ、お気になさらないで……

男 用があるんなら、ちゃんと、説明したらどうなんです。

父 そう、開きなおられちゃ、こっちも困ってしまうな……（同意を求めるように、一同を見まわす）

男（興奮気味に）困るだって？ 他人の家に、勝手に上り込んで来たりして、困るのは、こっ

ちじゃないか……

長男（壁を叩いてみて）なるほど、防音はちゃんとしているみたいだな……

長女 でも、冷えるわねえ。電気ストーブでもないのかしら。

男（たまりかね）うろろろするのは、よしてくれ！ さあ、みんな、すぐに出て行くんだ！

次男（けろっとした調子で）まるで、おれたち、招かれざる客になったみたいだな……

男 当然じゃないか、あつかましい！

末娘（奥の部屋をのぞき込み）　ねえ、こっちにも部屋があるわよ。

祖母　でも、九人に、たった二部屋だけじゃ、部屋の割りふりが容易じゃないねえ。（一緒にのぞきに行く）

次女　ぜいたくは言いつこなしょ。遊びに来たわけじゃないんだから。

男（混乱と不安で、奥の部屋のドアの前に立ちはだかり）　早く、出て行け！　さもないと、家宅不法侵入罪で訴えてやるぞ！

末娘（大げさにおびえて）　こわいわ、この小父ちゃん。

母（さとするように）　こわがらなくてもいいのよ。本当は、とてもやさしい小父ちゃん。ほら、よくくお顔を見てごらんさい。ちょっと、こわいようなふりをしているだけなのよ。

祖母　そうとも、いい男前さ。これで私が、もう十年も若けりや……

男　もう我慢ならん！（受話器をとろうとする）

父（その手をおさえ、おだやかに）　まあ、落着いて。君はどうも、ひどい誤解をしておいでなのうだ。まるで私どもが、危害を加えてもしたように騒ぎ立てておられるが……

男　危害じゃないですか。

父　なぜ？

男　他人の家なんだよ、ここは。

父（呆れた風で）他人の家？

長男（冷笑的に）他人の家とはまた、ずいぶん了簡のせまい男だな。

男 だって、現に、他人じゃないか！

父（なだめて）君、そんな小さなことを、いちいち気にすることはないんだよ。兄弟は他人の始まりっていうじゃないか。つまり、他人をさかのぼって行けば兄弟になるということでもある。他人でいいんだよ、君。そんなこと、これっぽっちも、気にかけることなんかありはしないんだ。

母 そうなの、私たちって本当にのんびりしていますのよ、もうおかしくくらい。（笑う）
男 ふざけるな。そっちがどう思おうと、とにかくここはぼくの部屋なんだ。

長女 当然じゃないの。さもなけりやあ、あなたがここにいらっしゃるわけないでしょ。

次男 さもなけりや、第一、そんなへらず口を、いつまでも黙って聞いてやってたりするもんかい。

次女 およしなさいったら。

次男 これは失礼。ちっとばかり、ふつか酔いなさ。ちくしゅうめ！

次男、てれかくしに、シャドウ・ボクシングをはじめ。次女ふと気づいた感じで、男の上着の毛くずをとってやろうとする。同時に長女が先手を打とうとする。もっとも、男が身をひいてこ